

寄贈資料

2019	
5.27	瀬戸義義様:Annual of the Southern Baptist Convention 1945、他15点
2020	
2. 3	安藤公正様:西南学院バプテスト教会60年史年表、他4点
2.10	大杉晋介様:葉室麟さんとの記念写真、他4点
3.30	安積道也様:西南オラトリオ・アカデミー録音、他20点
3.30	大杉晋介様:「ザザエさん募金」ニュース映像、他6点
4. 6	大塚浩之様:『百道会だより』(創刊号から2020年まで)
4.21	西南女学院様:W.M.ギャロット著『要』、他7点
5. 8	原田宏美様:キャラウェー宣教師夫人の似顔絵が描かれた皿
6. 8	吉田雅俊様:波多野培根が寄稿した『同志社新報附録』第44号
6.10	後藤新治様:大学図書館で使用したレンガの見本、他6点

活動記録

2020	
1. 7	複写:1964年百道浜の画像
1.11	借用:菊の紋章
1.11	複写:奉安室の画像23点
1.15	借用:旧制中学部の校章6点
1.16	複写:大学国際交流姉妹校宣言文5点
1.17	移管:H.C.ジョンソン『Called 召命を受けて』(大学図書館)
1.22	複写:ギャロット杯画像2点
1.28	複写:藤井政盛夫婦の受洗の画像13点
1.30	協力:昭和11年の百道海岸(RKB「今日感ニュース」)
2. 5	複写:藤井泰一郎関係資料17点
2.18	刊行:資料センター通信第3号
2.26	複写:学院創立前後の宣教師の画像27点
2.28	複写:地下鉄西新駅周辺の画像4点
3. 2	展示:企画展「西南学院を支えた79人の宣教師たち」 (~10.31<4.7~6.30~休館>)
3. 3	移管:Georgia Baptist Association(1829-1859)(大学図書館)
3. 3	複写:C.K.ドージャーとE.B.ドージャーの画像
4.15	会議:第1回学院史資料センター運営委員会(メール稟議)
5. 1	複写:100周年式典・講演会DVD
5.18	会議:アーキビスト採用委員会(Zoom会議)
5.20	借用:私立大学職員入門、私立大学のマネジメント
5.25	会議:アーキビスト採用委員会(Zoom会議)
6. 5	会議:第2回学院史資料センター運営委員会(メール報告)
6.15	会議:第1回バプテスト資料室検討委員会
6.16	移管:「西南学院大学学友会の結成について」(西南会館)
6.16	会議:第1回「宣教師文書研究」小委員会
6.26	調査:学院史基礎資料収集
6.30	閲覧:『児童教育科35年のあゆみ』
7. 1	閲覧:留学生別科修了式
7. 3	移管:学内各施設の平面図他(施設課)

資料センターのご利用について

西南学院の歴史に関する資料の閲覧をご希望の方は、事前に当センターへご連絡ください。資料の閲覧は、当センター内とし、原則として館外貸出はいたしません。また、資料を写真撮影・複写される場合には、許可が必要です。論文・図書・新聞・雑誌などに掲載(転載)または引用される場合にも許可が必要です。※コロナ禍の影響により、資料センターの利用を変更する場合がありますので、ご利用の際は事前にご連絡くださいますようお願いします。

学院史資料センター運営委員会

委員長:今井尚生(学院史資料センター長、院長)
委員:宮崎克則(大学博物館長)
北垣徹(大学図書館長)
金丸英子(神学部教授)
瓜生和也(中学校・高等学校教諭)
高口沙耶香(小学校教諭)
植崎賢(舞鶴幼稚園主任教諭)
土田珠紀(早緑子供の園副園長)
立石肇(総合企画部長)
松崎尚志(社会連携課長)

資料センター事務局
世戸口 尚英・高松千博・大石里紗

編集後記

昨年からのコロナ禍で、様々なことが変更や休止を余儀なくされた。本学の企画展も、一時中断しなければならなかつたが、今回の企画展は、感染予防対策を十分に行って開催したい。(世)

2019～2020.12.31	
6.12	山縣和彦様:チューリップのLPレコード、他7点
6.16	小林洋一様:金沢キリスト教会週報、他4点
8. 6	吉田雅俊様:1932年中学部卒業アルバム
8. 7	山縣和彦様:宮内淳のLPレコード、他3点
9. 3	小林洋一様:姪浜バプテスト教会60周年記念誌、他5点
9. 8	吉田雅俊様:河村幹雄博士遺稿、他32点
9.27	森政泰行様:「西南学院大学碧波寮」表札
9.29	中根広秋様:中学校・高等学校校舎新築工事建築写真アルバム、他13点
10.24	植崎篤行様:高等学部商科卒業アルバム、他6点
12. 1	播磨聰様:広島キリスト教会週報、他8点
12.23	山縣和彦様:HATO-POP-POのCD、他12点

2020	
1. 7	借用:1964年百道浜の画像
1.11	借用:菊の紋章
1.11	複写:奉安室の画像23点
1.15	借用:旧制中学部の校章6点
1.16	複写:大学国際交流姉妹校宣言文5点
1.17	移管:H.C.ジョンソン『Called 召命を受けて』(大学図書館)
1.22	複写:ギャロット杯画像2点
1.28	複写:藤井政盛夫婦の受洗の画像13点
1.30	協力:昭和11年の百道海岸(RKB「今日感ニュース」)
2. 5	複写:藤井泰一郎関係資料17点
2.18	刊行:資料センター通信第3号
2.26	複写:学院創立前後の宣教師の画像27点
2.28	複写:地下鉄西新駅周辺の画像4点
3. 2	展示:企画展「西南学院を支えた79人の宣教師たち」 (~10.31<4.7~6.30~休館>)
3. 3	移管:Georgia Baptist Association(1829-1859)(大学図書館)
3. 3	複写:C.K.ドージャーとE.B.ドージャーの画像
4.15	会議:第1回学院史資料センター運営委員会(メール稟議)
5. 1	複写:100周年式典・講演会DVD
5.18	会議:アーキビスト採用委員会(Zoom会議)
5.20	借用:私立大学職員入門、私立大学のマネジメント
5.25	会議:アーキビスト採用委員会(Zoom会議)
6. 5	会議:第2回学院史資料センター運営委員会(メール報告)
6.15	会議:第1回バプテスト資料室検討委員会
6.16	移管:「西南学院大学学友会の結成について」(西南会館)
6.16	会議:第1回「宣教師文書研究」小委員会
6.26	調査:学院史基礎資料収集
6.30	閲覧:『児童教育科35年のあゆみ』
7. 1	閲覧:留学生別科修了式
7. 3	移管:学内各施設の平面図他(施設課)

TEL:092-823-3920 e-mail: swarc@seinan-gu.ac.jp

平日(月～金) 9:00～17:00(最終入室16:30)
夏季休暇[8/10～8/16]、キリスト降誕祭[12/25]、
年末年始休暇[12/28～1/5]を除く

西南学院史資料センター通信

一粒小麦

Seinan Gakuin Archives Newsletter



大村部長(前列右から3人目)と高等学部の新聞部員たち(1939年6月)

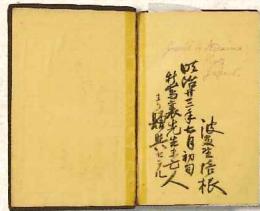
Contents

- 2021年企画展 2
「波多野培根—同志社と西南学院を支えた教育者」
- ギャロット伝が間もなく発刊 2
『ウィリアム・マックスフィールド・ギャロット伝
遣わされた方の御心を行つために』
- 資料センター所蔵資料の紹介(3) 3
『西南学院新聞』—学生の手による編集
- 寄贈資料・活動記録 4
- 資料センターのご利用について 4



「波多野培根—同志社と西南学院を支えた教育者」

2021年の企画展は、本学の教員で学生たちに薰陶を与えた波多野培根を取り上げる。波多野は、明治後期から第二次世界大戦期まで日本における教育・伝道を支えたキリスト者的一人である。同志社の創立者新島襄の高弟であった波多野は、同志社をはじめとする日本各地での教育・伝道活動を経て、1920年、53歳の時に教員として西南学院へ赴任してきた。以後、約24年間にわたって西南学院の教育を支え続け、学院の歴史に重要な足跡を遺した。



◆波多野に形見分として贈られた新島襄の旧蔵書



期 間：2021年3月1日～5月31日
会 場：西南学院百年館(松緑館)1F企画展示室
休館日：日曜日、5月3日～5日

波多野培根(76歳)

第1章 同志社と波多野培根

波多野がキリスト教の道に入るには、同志社英学校(後の同志社大学)入学のことである。同志社在学中に新島襄の薰陶を受け、宣教師ラーネッドより洗礼を受けた波多野は、儒教とキリスト教を自身の精神的な柱としながら、教育者としての道を歩んでいくことになる。



◆波多野の直筆による格言が記された円額



◆波多野による「韓国合併」を非難した巻物

第2章 西南学院と波多野培根

西南学院の創立者C.K.ドージャーの招きを受けて同学院に赴任してきた波多野は、以後約24年間にわたって教鞭を執り続けた。同時代は日本が世界大戦の渦中に突き進んでいた時期であり、独善的な愛国教育が国内に蔓延していた。このような時代の中、同志社時代より愛国の問題を考え続けていた波多野は、1944年に「基督と愛国」と題する記念講演を行う。

ギャロット伝が間もなく発刊

『ウィリアム・マックスフィールド・ギャロット伝 遺わされた方の御心を行なうために』



ギャロット伝は、①大学開学70周年を踏まえて、初代学長のW.M.ギャロットの事績を明らかにしたいという資料センター運営委員会の意向があったこと、②百年史編纂委員会からの申し送り事項であったこと、さらに③K.J.シャフナー前学長が個人的な課題としてあたためていたギャロット先生の伝記を学長退任を機に再び取り組みはじめたこと、という3つの要因が重なって生まれた。また、資料センター運営委員会では、発刊のためのプロジェクトチームを設けて監修及び編集にあたっている。

ウイリアム・マックスフィールド・ギャロットは、少年期から父の影

響もあって宣教師を目指すようになり、1934年、24歳の時に伝道に生涯をささげることを決意し、宣教師として来日した。その後、日本語の研修を経て、1936年に西南学院高等学部教師に就任したが、戦時色が濃くなり、戦時強制収容所を経てアメリカに送還されるなど、厳しい時代を過ごした。そして戦時中は、日米の架け橋になろうとアーカンソー州の日系人収容所で牧師を務め、また日本に少しでも近いハワイでラジオによる宣教活動を行うなど布教に尽力した。

終戦後、ギャロットは再び西南学院に戻って初代学長に就任し、学生運動が過激になりつつある中、戦後の復興や草創期の大学の運営など身を粉にして重責を果たした。学院の創立者C.K.ドージャーとともに、西南学院を支えた一人であるギャロットの功績を紹介する1冊となっている。

なお、発刊は4月末で、一般の書店でも販売する予定である。

資料センター所蔵資料の紹介〈3〉

『西南学院新聞』—学生の手による編集

◇創刊の原動力は3人の同級生

現在、大学は広報誌「SEINAN Spirit」を発行しているが、その前身にあたる「西南学院大学広報」は、1967年に創刊されていた。そこから遡ること33年前に旧制高等学部の学生の手で編集された新聞『西南学院新聞』が存在した。それは、「学生による健全な言論機関を作つて、学院と学生、同窓生をもっと緊密なものにし、学院独特的の使命と理想をはっきりと社会に認識させる」ことを目的に、1934年3月、創刊された。

同新聞創刊時の中心となった太田治雄、佐々木剛、村上寅次の3人は、いずれも高等学部商科のクラスメイトで、3人ともYMCAに所属しており、同人紙「スクラム」などを作つて回り読みしては、お互いに批評し合う仲だった。卒業生の送別会を兼ねた1934年の西南YMCAの総会の席で、3年生の太田が学友会の学芸部部長に立候補することを表明し、あわせて太田があたためていた新聞発刊の計画を提議した。この計画に佐々木、村上らが賛同し、1934年3月10日、高等学部学生による『西南学院新聞』第1号が誕生し、学内の学生に配られたのである。

創刊号は、四六8切(272ミリ×394ミリ)、4ページ、月1回発行、無料で学内に配布された。当時、他大学の学生新聞がそうであったように、有料広告を掲載し印刷費に充てた。現在、当資料センターには、第241号(1971年7月10日発刊)までが保管されているが、残念ながら、第2、3、31、34、45、46、47、48、49、52、66の各号が欠号となっている。

学生の手による
『西南学院新聞』
(1934年3月)▶



◀刷りあがった新聞の配布準備をする新聞部員(1940年頃)▶

◇戦時色が濃くなった紙面

こうして『西南学院新聞』は、創刊号以来の編集方針を守つたが、1936年ごろからは、「御真影奉戴」、「学院出身戦没者追悼記念式」、「紀元2600年奉祝 式典に水町院長参列」といった見出しが目立つようになってきた。そしていよいよ「日米戦争は始まって居る」(1941年2月3日)という見出しに象徴されるように、国際社会の情勢は開戦が避けられない状況になった。1941年12月8日にアジア・太平洋戦争が勃発すると、世の中は一気に戦時色に染まつていった。開戦時の様子を同新聞で探すと、45号から49号まで(44号は1941年2月3日、50号は1942年5月9日発行)は欠号になっており、残念ながら詳細は分からない。戦局終盤の1943年に明治神宮外苑で出陣学徒壮行会が行われると「戦はん哉、学徒我等 一億総決起の秋学兵は征く」、「皇風宣揚に勇戦奮闘せられよ」(同62号、1943年11月25日)など、勇ましい見出しが並び、士気高揚の一端を担つた。その同新聞も、63号(1944年4月20日)から「当局の命により本紙は本号を以て休刊致します。」という断り書きにより、1946年9月25日の64号が発行されるまで、2年半の間、一旦休刊となつた。

◇社会の変動とともに変わってきた役割

戦後、『西南学院新聞』は、大学が開設されると同時に『西南学院大学広報』と名称も変わつたが、その役割も変わつてきた。その背景には、戦後の復興期から高度成長期にかけて大きく変化した社会もあって、学生も学内の情報よりも社会の動きやその影響に关心が高まつたことによると思われる。そのような中で、1948年に日本の学生自治会の連合組織である全日本学生自治会総連合(全学連)が組織され、学費値上げなどの社会における不満から、学生運動が活発になつた。「破防法反対」、「原水爆禁止」、「日米安保反対」、「三池争議」などが社会問題になり、同新聞も中立の立場から学生寄りに大きく傾いていた。さらに自治会や新聞部などが学生運動の活動拠点になるなど一層活発になり、一般の学生を導くのは学生新聞の役割であると言わんばかりに、同新聞の紙面も学生運動に連動して政治色が強くなつた。その顕著な例として、過激な学生運動により東京拘置所に収監されている本学の学生が、自身の保釈金カンパを呼びかける原稿を掲載している。『西南学院新聞』は、戦時中の一時期に休刊したもの、37年の長きにわたつて続いていたが、読者である学生と徐々に距離が生じて学生運動と共に衰退し、1971年7月10日の第241号をもつて廃刊となつた。